

ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1859-1860 について*

荻原裕敏

キーワード: クチャ仏教 弥勒経典 『ザンバスタの書』

要旨

本稿では、ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1859 及び THT1860 を扱う。両断片は文字特徴・言語特徴の両面から Archaic Tocharian B に属する事が既に指摘されており、部分的に研究者によって利用されているが、断片全体の解釈は未だ為されていないため、内容比定や他言語による文献との比較及び仏教史における位置付け等が課題として残されたままとなっていた。ここでは、漢訳仏典などの関連文献を利用し、両断片が弥勒経典に比定される事を明らかにすると共に、同時代の中央アジアにおける弥勒信仰の状況を伝える資料と考えられるコータン語『ザンバスタの書』第 22 章との比較を行う。

1. 導入

本稿ではドイツ・ベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) 所蔵トカラ語 B 断片 THT1859 及び THT1860 を扱う。この二断片は文字及び断片の大きさや一葉辺りの行数などといったフォーマットから同一写本に属していたと推定され、トカラ語文献学の研究では、言語特徴から両者共に Peyrot (2008: 224) によって Archaic-I に分類される一方で、文字特徴の面から Malzahn (2007: 266) が <o> 及び <ma> の二つの aksara を除いて Common Archaic に分類される Brāhmī 文字で書写されているとしている¹。このようにトカラ語 B 文献中、両断片は古層に属するものである事もあり、両断片に現れる言語学的に重要な形式はトカラ語研究の中で既に利用されており、その際に部分的な引用も行われてはいるものの、両断片全体の解釈や内容比定、またそれに基づいた他言語による文献との比較及び仏教史における位置付け等が未解決のままとなっていた。

* 本稿は、公益財団法人三島海雲記念財団より第 52 回 (平成 26 年度) 三島海雲学術研究奨励金を助成頂いた研究課題『シルクロードにおける弥勒関係仏典の研究-トカラ語及びコータン語資料を中心に-』の研究成果の一部である。奨励金を助成頂いた同記念財団に深く感謝申し上げる。

¹ 現在トカラ語文献学では、トカラ語 B 文献が言語特徴及び文字特徴の両面から、それぞれ三つの段階に分類される事が明らかになっている。即ち、言語特徴の面からは、Archaic Tocharian B (4-6 世紀), Classical Tocharian B (5-6 世紀), Late Tocharian B (7 世紀以降) に、一方文字特徴からは Archaic (4-6 世紀), Standard (7 世紀), Late (8 世紀以降) に分類される。この二つの分類の内、言語特徴からの分類については Peyrot (op.cit.: 204-206) を、文字特徴に基づく分類については Malzahn (op.cit.) 及び Tamai (2011) を参照されたい。ただし、この二つの分類が年代的に同じ時代を反映するものであるか否かについては、今後も検討が必要である。

また、THT1859 及び THT1860 に見られる <o> 及び <ma> の二つの aksara が Common Archaic に属さない点から、当該断片はオリジナル作成時期当時の断片ではなく、後に書写されたものと推定される。このような見方は、言語特徴の面からも両断片には Archaic Tocharian B の特徴を示す語形 (e.g. *lkātrā*) と示さない語形 (e.g. *lkāntrā*) が混在している事実によって裏付けられる。従って、上記 Peyrot による Archaic-I という分類は全ての語形に該当するわけではない。なお、THT1859 及び THT1860 には <v> に近接する子音の gemination の用例が頻繁に見られるが、この点については Ogihara and Pinault (2010: 196-197) を参照。

このような問題を解決するため、筆者は漢訳仏典等の関連文献を利用して、両断片の内容比定を行うと共に、中央アジア仏教史における両断片の位置づけを検討する。筆者の研究によれば、両断片は弥勒経典に比定されるだけでなく、同じく弥勒経典の伝承を含んだコータン語『ザンバスタの書』第22章と共に、中央アジア地域に5世紀頃に流布していた弥勒信仰を反映していると考えられる。

2. THT1859 及び THT1860 の校訂と内容比定

2-1. THT1859

2-1-1. 転写と和訳²

THT1859 は表裏共に6行ずつ書かれており、左から約4cmの位置に紐穴が残存しているが、断片の左右には欠落が見られ、完全な断片ではない。筆者の研究によれば、現在 IDP 及び TITUS 上で公開されている写真では表裏が反対となっており、THT1859 のラベルが貼られている面が裏面に相当する事から、以下ではこの修正を反映させた上で表裏に言及する。当該断片のサイズは高さ6cm・幅15.9cmであり、両面には罫線が確認されるが、その間隔は行によって若干の差が見られ、大凡0.8-1.1cmとなっている³。筆者の分析では、全体は韻文で書かれており、韻律は4行×25音節と推定され⁴、残存部分は strophe 60b-64b に相当すると考えられるが、韻文の再建については後に扱う。

なお、THT1859 と THT1860 が同一写本に属する事は文字・写本のフォーマットだけでなく内容からも裏付けられるが、両断片共に folio number が記載される左端を欠いているため、両断片の写本における具体的な位置を正確に推定する事は困難である。ただし、筆者による内容比定が正しいならば、両断片は弥勒経典の終りに近い部分に位置しており、THT1859 は THT1860 に先行する断片であると言う事ができる。また、THT1859 と THT1860 が直接連続する断片か、或いは両断片の間に別の folio が存在していたかについては、THT1860a1-2 の部分の破損により内容・韻律共に正確に推定できないため、判断が困難であるが、筆者は比定した内容から両断片が同一写本の連続する folio であったと推定している。

[転写]

a

² 以下の転写では下記の転写方式を採用する。

[]: 破損による読みが不確定な箇所	-: 破損により判読不能な <i>akṣara</i>
(): 筆者によって推定された箇所	⋮: <i>akṣara</i> の欠けている子音若しくは母音
///: 写本の破損箇所	{ }: 断片の破損による欠落
[[]]: 断片の行間に書かれた修正部分	=: sandhi

³ なお、THT1859 のラベルには MQ70.7-9 を参照すべき旨が記されているが、この三点は既に出版済の B273-275 であり、その内 B274-275 は THT1859-1860 と同じく弥勒を主題としている。ただし、B274-275 のサイズは、THT1859-1860 と同じだが、文字に相違が見られるため、異なる写本に属すると推定される。また、THT1859-1860 には出土地点を示す番号が附されていないため、出土地点を確定する事はできないが、Archaic に属するという文字特徴から見て、クチャ地域特にキジルで発見された可能性が高い。

⁴ 当該断片については、THT1859b3 を引用した上で Peyrot (2013: 301, n. 254) も同様の韻律を推定している。

- 1 /// $_{[u]s}^{[1]}$ tsānkare – {–} (k) $_{[u]s(e)}$ {–} [s]p· {–} – ·y· [w]c· ·ts· {–} wn· cowai ta[r]kanantra
[au]·s· – ///
- 2 /// (s)n(ai) kwipe ausa snai p[e]rnn = [ā]yāttaite at[e] tot no ōnkipše te mant karsormem
mrauskantra snai keš [k]o(dyänma) ///
- 3 /// (ā)[kl](e)n(e) martkantr ašca^[2] snai- O y enka₁ 60 kukūrapādä šalemem [[yā]st^[3] lam
kentsänts wālo ramt iprerne ///
- 4 /// [pa]^[4] prutkaššam ramt po wā[l]am O ipreḡ nākcyē šaiššesa wārñnai po kašyapi ka ke_uc
lkāntra tarkam^[5] ///
- 5 /// – ksa puwar peynemem lanme nai šše pūwar ramt₁ amnts nemem pūwar wār nno peynemem
tarkamtar [w]·r·e^[6] ///
- 6 /// (6)1 ly[k]emane ywārcco š[m]e[m](a)[n]e y[w]arc(c)o^[7] k[ly]emane y[w]arc [c]ānk(r)ami(t)
[y](·)·r· – s(·)e m[a]·o m[p]·tt[ā] i ///
- b
- 1 /// – [k]enne yāpam wārne ramta [i](ā)[kam] pākr(i) ak[a]šne nḡno še lkatra [k](aš)y(a)p(e)
[y]pr(er)nn(e)p·c·[tk]· ///
- 2 /// – kašyapi stāmam sū tkentsā^[8] entwe kka alpam ysasšene ramt^[9] yerkwāntane šarnnene = nktḡa
kaun meñ[o] – ///
- 3 /// (prati)[h]arinta kašyape aim ša- O mnants (l)[k]atsi klutkaššamne akteke akšam maitreye
yäst cvī krewpentse – ///
- 4 /// šce^[10] candamššana aj[a]- O ne se se orotse kašyape nēm še_i šakyamūniñ pudñāk[t]e(ntse) ///
- 5 /// – pisaka šukto [k]odyänma = llo(m)kna škas kante tmane pikwāla k_uce se cārka kektsēñ 63 kr_ui ///
- 6 /// [c]ä pi klyā [p]· – [l](·)[e] – (·)e {–} – [p](u)[d](ñ)ä[k](t)e s(·)·(·)e rsa kwāntsän po tkentsa
k[w]ānt[s]am – – ///

[注釈]

- (1): この部分の切れ目は不明であるが、一語として *nauš* “once upon a time”の Archaic Tocharian B の語形である $(ne)_{u,s}$ が推定されるかも知れない。
- (2): ここに在証される *ašca* は、*āšce* “head”の単数斜格形 *āśc* の Archaic Tocharian B の語形であり、単数斜格形としては初出の語形である。
- (3): 書写の際に書き落とした <yä> を行間に追加しているが、本文に現れる <ya> と同じ字形を示しており、同一の scribe によって追加されたと推定される。
- (4): 母音は推定不能だが、基字を <pa> と推定する事も可能である。
- (5): 後続する a5 に見られる *tarkamtär* を参考に、ここには同一語形が推定されるが、後続する語を正確に推定できないため、*tarkam(tär)*, *tarkam(trä)*, *tarkam(tr)* のいずれであるかは不明である。なお、この語形は Malzahn (op.cit.: 656-657) 及び Adams (op.cit.: 310-312) では指摘されていないが、語根 *tärk-* “to emit”の 3pl.subj.mid. である。

- (6): この部分の語の切れ目は不明であるが、*war* “water”と解釈されるかも知れない。
(7): 或いは *y[w]arco* と推定する事も可能である。
(8): この部分は7音節が要求されるが、1音節多く、8音節となっている。なお、b6にも在証される *tkentsa* については、Adams (op.cit.: 205) を参照。
(9): この部分は5音節が要求されるが、1音節少なく、4音節となっている。
(10): ここには *āsce* “head”の単数主格形 *āsce* が推定されるかも知れない。

[和訳]

a

- 1 [...] 以前(?), [...] が起こった。[...] する者 [...] は盗まれており [...]
- 2 [...] 恥じる事なく [...] 輝きなく、抑制する事ができず^[1]、全く恥じる事を知らない。このように知ってから、無数の(人々)が^[2]
- 3 苦しみの中で厭世観を抱き、執着心なく頭を剃る[= 出家する]だろう。//60// *Kukūrapāda* 山から断崖が現れるだろう^[3]。彼は大地の王の如く空中に [...] ^[4]
- 4 天界を始めとする空全体を彼は満たし、覆うかの如くである^[5]。複数の摩訶迦葉が空高くに見えるだろう。[...] が放たれるであろう。
- 5 [...] 彼らの両足から炎が、恰も一つの炎の如く出るだろう。両肩から炎が、両足から水が放たれるだろう。水(?) [...]
- 6 //61// 彼は空中に横たわり、空中に座り、空中に立ち、空中を(?)経行し [...] ^[6]

b

- 1 [...] 水に入るかの如く大地に入り、空に現れるだろう。また、一人の摩訶迦葉が空中に見えて [...]
- 2 [...] 摩訶迦葉は大地に立つだろう^[7]。そして、恰も黄金でできた二つの車輪を両手に掴むように、彼は太陽と月に触れるだろう。[...] ^[8]
- 3 [...] 摩訶迦葉は衆生達に奇跡を見せ、彼等を驚かせるだろう。弥勒はこの集団に断崖について説明するだろう。 [...]
- 4 [...] 白檀の [...] ^[9]。彼は摩訶迦葉という名前で^[10]、仏陀釋迦牟尼の [...] だった。
- 5 彼[= 仏陀]が身体を放棄してから57億6百万年である^[11]。//63// もし [...]
- 6 [...] 仏陀 [...] 大地全てに [...] ^[12]

[注釈]

- (1): 筆者が *ausa snai p[e]rmn = [ā]yātaite* とした部分を、Adams (2013: 141, 392, 643) は *ausa snai parmnā yāntaite* とし、*ausa* を *auso** “clothing, outer covering”の単数斜格形、*snai parmnā* を *snai* “without”と *pārna** “external influence”の複合語、*yāntaite* を語根 *wānt-* “(K) to exchange”の2du.pret.mid.と解釈し、根拠として当該箇所が仏陀と摩訶迦葉が衣服を交換する場面であると考えられる点を指摘するが、関連する漢訳・コータン語・梵語などの文献にはこのような記述は見られない。筆者は、当該箇所を含む *strophe* 60 が『佛說彌勒大成佛經』「復更讚

歎彼時眾生於苦惡世能為難事。貪欲瞋恚愚癡迷惑短命人中。能修持戒作諸功德。甚為希有。爾時眾生不識父母沙門婆羅門。不知道法。互相惱害近刀兵劫。深著五欲嫉妬諂佞。曲濁邪偽無憐愍心。更相殺害食肉飲血。不敬師長不識善友。不知報恩。生五濁世不知慚愧。晝夜六時相續作惡不知厭足。純造不善五逆惡聚。魚鱗相次求不知厭。九親諸族不能相濟。善哉善哉釋迦牟尼佛。以大方便深厚慈悲。能於苦惱眾生之中。和顏美色善巧智慧。說誠實語示我當來度脫汝等。如是導師明利智慧。世間希有甚為難遇。深心憐愍惡世眾生。為拔苦惱令得安隱。入第一義甚深法性。釋迦牟尼三阿僧祇劫。為汝等故修行難行苦行。以頭布施。割截耳鼻手足肢體受諸苦惱。為八聖道平等解脫利汝等故。時彌勒佛如是開導安慰無量諸眾生等。令其歡喜。彼時眾生身純是法。心純是法。口常說法。福德智慧之人充滿其中。天人恭敬信受渴仰。時大導師各欲令彼聞於往昔苦惱之事。復作是念。五欲不淨眾生之本。又能除捨憂感愁恨。知苦樂法皆是無常。為說色受想行識苦空無常無我。說是語時。九十六億人不受諸法。漏盡意解得阿羅漢。三明六通具八解脫。」(T.14, no. 456, 432b3-b29)に關連すると考え、世間の乱れた状況を描写した部分と推定した⁵。筆者の解釈に従えば、*ausa snai p[e]rnn = [ā]yātaite* は全て主格形であり、後半は *perne ayātaite* の sandhi と推定される。この解釈が正しいならば、Toch.B: *ausa* は hapax となり、語義は不明ながらも、前後の文脈から否定的内容を表す語と考えられる。また、Toch.B: *ayātaite* も同じく hapax であるが、語根 *yāt-* “to control, tame” から派生し、従来主格形以外の形式である *ayātaicce* (m.sg.obl.), *ayātaiccu* (m.sg.voc.), *ayātaiccem* (m.pl.obl.) のみが知られている語の男性単数・主格形と解釈した⁶。なお、この断片では ligature である <nta> と <tta> の区別は明瞭であり、前掲 Adams の *yāntaite* という読みは支持されない。

- (2): 文脈から *onolme* “(living) being” の複数主格形 *onolmi* が推定されるが、この部分には韻律によって2音節が要求されるため、第1音節が sandhi によって半母音化した *wnolmi* が妥当であると考えられる。
- (3): この部分は、コータン語で書かれた『ザンバスタの書』第22章 strophe 281: *hamata śsandā rṛātu yande ggarū sarbite kāḍā māstā | myāño ṛṃkhānu samāhāna mahākāśyavi āste* “The earth itself will split apart and a very large mountain will arise. Amid its peaks, Mahākāśyapa will be sitting in meditation.” (Emmerick op.cit.: 330-331) を参照した。また、摩訶迦葉が瞑想していた山の名称は、他の文献から知られている Skt. *kukkuṭapāda*-或いは *gurupāda*-などと言った語形と、本断片に在証される形式では異なっているが、説一切有部に属すると推定されているロシア蔵メルブ出土梵語仏教説話集に含まれる同一の場面を描いた箇所には *kukkuṭapāda*-という語形が在証されており、トカラ語 B 語形から推定される原語に非常に近い形を示している (Karashima and Vorobyova-Desyatovskaya 2015: 263 n. 162)。

⁵ コータン語『ザンバスタの書』第22章 234-239 詩節 (Emmerick 1968: 324-325) に相当する。なお、『ザンバスタの書』第22章は漢訳と叙述の順序が異なり、弥勒による三度の説法への言及がその内容よりも先に語られる。また、熊本 (forthc: 5) では弥勒による説法を漢訳及び梵文と異なり一度としているが、217-218 詩節 (Emmerick: op.cit: 320-321) では三度説法が行われた事が語られている。

⁶ Adams (op.cit.: 22) はこの語を *ayātaistse** と推定している。

- (4): この文の主語は摩訶迦葉と推定されるが、この断片では多くの場合 Skt. *kāśyapa*-の借用語である *kāśyape* が使用される⁷。また、「大地の」と和訳した部分は断片には *ke ntsā nts* とあり、この部分について Adams (op.cit.: 207) は *kents** “goose”の複数属格形と解釈しているが、筆者は *keṃ* “earth, ground”の単数通格形 *kentsa* の書き誤りであり、この書き誤りに対して *kentsa wālo** → *kentsā wālo** → *kentsānts wālo* という過程を想定した。なお、この後に続く摩訶迦葉が示した十八変については、2-1-3 節に示す『佛説彌勒大成佛經』以外にも、漢訳仏典及びパーリ語仏典など多くの仏典にパラレルが見られる。ここでは、漢訳『長阿含經』卷 12 (T.01, no. 1, 78b26-c04) とそれに対応するパーリ語仏典である DN.XXVIII.18 (DN III: 112; Walshe 1995: 423-424) のみを挙げておく。
- (5): ここでは、Adams (op.cit.: 451) で推定される *jālam* “blazing (?)”ではなく、*wālam* と解説し、語根 *wāl-* “to cover”の 3sg.subj.act.と推定した。なお、この語形は Malzahn (2010: 871) 及び Adams (op.cit.: 638-639) では指摘されていない。
- (6): 残存部分から *[y](wa)r(c)* “in the midst, in mid air”を推定する事が可能かも知れないが、その場合は韻律から期待される 8/7 音節ではなく、7/8 音節となる。
- (7): 前後の文脈からは在証される *kaśyape* の複数主格形 *kaśyapi* ではなく、単数主格形 *kaśyape* が期待され、書写の際の誤りの可能性が高い。
- (8): この部分は、漢訳『長阿含經』卷 12 「以手捫日月，立至梵天。」(T.01, no. 1, 78c3-4)・パーリ語 DN.XXVIII.18 (DN III: 112): *ime pi candima-suriye evaṃ-mahiddhike evaṃ-mahānubhāve pāṇinā parimasati parimajjati, yāva brahma-lokā pi kāyena vasaṃ vatteti* “he even touches and strokes with his hand the sun and moon, mighty and powerful as they are; and he travels in the body as far as the Brahmā world.” (Walshe op.cit.: 424) 及び漢訳『別譯雜阿含經』卷 6 「身至梵天，手捫日月」(T.02, no. 100, 417a12-13)・パーリ語 SN.XVI.9.11 (SN II: 212): *ime pi candimasūriye evaṃ mahiddhike evaṃ mahānubhāve pāṇinā parimasāmi parimajjāmi || yāva brahmalokā pi kāyena vasaṃ vattemi* “with my hand I touch and stroke the moon and sun so powerful and mighty; I exercise mastery with the body as far as the brahmā world.” (Bodhi 2000: 673) などにパラレルが見られる点及び次節で示すように韻律から、この部分が先行部分と同一の文に属するとする Adams (op.cit.: 60) の解釈は訂正されるべきである。また、この対応から、これまで十分には語義が解明されていなかったトカラ語 B の語根 *ālp-*が、基本的な語義として“to touch, stroke”を表す事が支持される。なお、後続する欠落部分には、梵天へと昇る事に関連する記述が続いていたと推定される。
- (9): ここに見られる *ajane* は hapax であり、意味を確定できないが、先行する形容詞から双数形と推定される。
- (10): Toch.B: *orotse kaśyape* の内、形容詞 *orotse* “great, large”が Skt. *mahākāśyapa*-の前半部分に対応しており、B12a5 に見られる *mahākāśyape* とは異なっている。

⁷ Skt. *kāśyapa*-が *mahākāśyapa*-と同一人物を指示する点については、Edgerton (1953: 182) を参照。

(11): Adams (op.cit: 311) に指摘されるように、「身体を放棄した」とは「涅槃に入った」を意味する。ここで注目されるのは、仏陀が涅槃してから「57 億 6 百万年」という記載である。一般的に弥勒の下生は仏陀の涅槃から 56 億 7 千万年後とされており、THT1859b5 の記述とは一致しない。これが基づいた伝承の相違に由来するものか、或いはクチャ仏教における独自の発展かという点については判断できない。

(12): 筆者が *k[w]änt[s]am* とした部分を Adams (op.cit.: 254) は *kwäntam* と読み、語根 *kwänt-* “to sink” の 3sg.subj.act. と推定するが、当該断片に見える他の用例から二番目の *akṣara* は <nta> ではなく <ntsa> とする方が妥当である。また、この語の後に Adams は *kaśyape* を推定するが、残存部分からこの推定は支持されない。なお、ここに在証される Toch.B: *kwäntsam* が *kwants** “firm” の男性単数・斜格形であるとする Adams (op.cit.: 252) の指摘が正しい否かは、文脈からは判断が困難である。

2-1-2. 韻文の再建

本節では THT1859 の韻文を再建する。前節で指摘したように、当該断片は 4 行×25 音節の韻律で書かれていたと推定される。この推定が正しいならば、THT1859 には *strophe* 60b-64b が与えられており、以下のように韻文を再建する事ができる。

THT1859 [4×25 (= 5/5/8/7)]: 60b-64b

<a1> | {-}_{[u]} ṣ tsänkare - | {- -} (k)_{[u]}s(e) {- -} | [s]p· {- -} - ·y· [w]c·
·ts· {-} | wn· cowai t[ä]r]kānātrā |

[au] ·s· - {- - | - -} <a2> (s)n(ai) kwipe | ausa snai p[e]rnn = [ā]yāttāite |
at[e] tot no oṅkipṣe |

te m[ā]nt k[ä]rsormem | mrauskantrā snai keś | [k]o(dyānma wnołmi <a3>
l[ä]k[ä]l(e)n(e) | m[ä]rkantr aṣca snaiy eṅkäl //60//

kuk[ä]rapādā | ṣālemem [[yā]]st lām | kentsānts wālo ramtt iprerne | {- - - -
- -} <a4> [pā] |

prutkaṣṣām ramtt po | wā[l]am iprerā | n[ä]kcyē śaiṣṣesa wārññai po | kaśyapi
ka ke,c lkāntrā |

tārkaṃ {- - - | - - - - - | -} <a5> - ksa puwar peynemem | länme
nai ṣṣe pūwar ramt |

amntsnemem pūwar | wār nno peynemem | tārkaṃtār [w]· r·e {- - - | - -
- - - -} <a6> //(6)1//

ly[k]emane ywārcco | ṣ[m]e[m](a)[n]e y[w]arc(c)o | k[ly]emane y[w]arc [c]ānk(r)ami(t)
[y]· | r· - s(-)e m[a] ·o m[p]· tt[ā] |

i { - - - - | - - - - } <b1> - | [k]enne yāpām wārnne ramtā |
 [t](ā)[kaṃ] pākr(i) ak[a]śne |
 nāno še lkatrā | [k](aś)y(a)p(e) [y]pr(er)nn(e) | p· c· [tk]· { - - - - } <b2> -
 | kaśyapi stāmam sū tkentsa |
 entwe kka alpam | ysaṣṣene ramtt | yerkwāntane śārnne = nkrā | kaun meñ[o] -
 { - - - //62// }

{ - - - - - | } <b3> (prati)[h]arinta | kaśyape aiṃ śamnants (l)[k]atsi |
 klutkaśāmmme akteke |
 akśām maitreye | yāst cvī krewpentse | - { - - - - - } <b4> śce |
 candamṣṣana aj[a]ne |
 se se orotse | kaśyape ñem še_i | śakyamūniñ pudñāk[t]e(ntse) | { - - - - -
 - } <b5> - |
 piśaka ṣukto | [k]odyānma = llo(ṃ)kna | śkāś kānte tmane pikwāla | k_uce se cārka
 kektseñā //63//

kr_ui { - - - - | - - - - } <b6> [c]ä pi | klyā [p]· - [l](·)[e] - ·(·)e { -
 - } | - [p](u)[d](ñ)ä[k](t)e s(·)· (·)e rsa |
 kwāntśān po tkentsa | k[w]ānt[s]am - - { - | - - - - - - - - - - | - - - -
 - - - - - | }

2-1-3. 内容比定

前節で転写及び和訳を与えた THT1859 は、弥勒が出家した人々を伴い *Kukūrapāda* 山に摩訶迦葉を訪れ、摩訶迦葉が彼らに十八変を示す場面を中心としている。他言語で書かれた弥勒下生に関する文献の内、THT1859 に関連する内容を含むものとしては、主として以下の文献を挙げる事ができる。

[漢訳]⁸

『增壹阿含經』「十不善品(三)」(T.2, no. 125, 787c02-789c27)

『佛說彌勒下生佛經』(T.14, no. 453, 421a3-423b12)

『佛說彌勒下生成佛經』(T.14, no. 454, 423c5-425c22)

『佛說彌勒下生成佛經』(T.14, no. 455, 426a3-428b16)

『佛說彌勒大成佛經』(T.14, no. 456, 428b24-434b12)

[梵文]

⁸ これらの漢訳仏典相互の関係については、熊本 (forthc. 4, n. 13) を参照。なお、これらの漢訳仏典の内、『增壹阿含經』「十不善品(三)」を除く四つについては、Leumann (1919: 245-254, 227-236, 237-244, 255-280) でドイツ語訳が与えられている。

《*Divyāvādāna*》第三章《*Maitreyāvādāna*》: Vaidya (1959: 34-40)

《*Maitreyavyākaraṇa*》: Lévi (1932)⁹

[コータン語]

『ザンバスタの書』第22章: Leumann (1919: 61-116), Emmerick (1968: 300-341)¹⁰

[トカラ語 A]

《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》: Sieg and Siegling (1921)¹¹

[古代ウイグル語]

《*Maitrisimit nom bitig*》: Tekin (1980), 耿 (2008)¹²

これらの文献の内、摩訶迦葉によって示された十八変とそれに続く仏法の伝授は、漢訳仏典中、鳩摩羅什訳『佛説彌勒大成佛經』に対応部分が確認されるだけでなく、コータン語『ザンバスタの書』第22章280-302詩節(Emmerick 1968: 330-335)でも語られている。以下では『佛説彌勒大成佛經』に見られる関連する部分を引用するが、トカラ語B断片THT1859の内容理解に資する部分を下線(実線)で示す事とする。なお、引用は、穰佉王の弥勒の下への出家とそれに続く説法の部分以降である。

『佛説彌勒大成佛經』¹³

「穰佉王千子唯留一人用嗣王位。餘九百九十九人。亦與八萬四千人。於佛法中俱共出家。如是等無量億眾。見世苦惱五陰熾然。皆於彌勒佛法中俱共出家。爾時彌勒佛以大慈心語諸大眾言。汝等今者不以生天樂故。亦復不為今世樂故來至我所但為涅槃常樂因緣。是諸人等皆於佛法中種諸善根。釋迦牟尼佛出五濁世。種種呵責為汝說法。無奈汝何教殖來緣。今得見我。我今攝受是諸人等。或以讀誦分別決定修多羅毘尼阿毘曇。為他演說讚歎義味。不生嫉妬教於他人令得受持。修諸功德來生我所。或以衣食施人持戒智慧。修此功德來生我所。或以妓樂幡蓋華香燈明供養於佛。修此功德來生我所。或以施僧常食。起立僧房四事供養。持八戒齋修習慈心。行此功德來生我所。或為苦惱眾生深生慈悲。以身代受令其得樂。修此功德來生我所。或以持戒忍辱修淨慈心。

⁹ Léviによって出版された《*Maitreyavyākaraṇa*》には前半に欠落がある。また、その後 Gilgit 及び Kathmandu 発見の写本にも《*Maitreyavyākaraṇa*》の存在が確認された。さらに、Schøyen 資料中にも《*Maitreyavyākaraṇa*》の断片が含まれている事が近年明らかになった。Lévi の研究も含めて《*Maitreyavyākaraṇa*》断片については、Hartmann (2006) を参照。なお、《*Maitreyāvādāna*》と《*Maitreyavyākaraṇa*》の内容の相違については、熊本 (op.cit.: 6)を参照。THT1859-1860 はこの二つの梵語文献とは異なっており、両者いずれにも比定されない。

¹⁰ なお、本稿で比較したこれらの仏教文献中に占める『ザンバスタの書』第22章の位置づけについては、熊本 (op.cit.) を参照。

¹¹ ドイツ所蔵トカラ語 A《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》断片は、その翻訳とされる次項の古代ウイグル語《*Maitrisimit nom bitig*》に基づいて対応箇所が Pinault (1997) によって明らかになっているが、1974年に Shorchuk で発見されたトカラ語 A 写本は弥勒下生に関する部分を含まない。なお、トカラ語 A《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》に関連する研究は数多いため、ここでは取り上げない。

¹² 古代ウイグル語《*Maitrisimit nom bitig*》の写本はハミ本とトゥルファン本に大別されるが、近年ハミ本の研究の進展によってトゥルファン本の内容比定に誤りが見られる事が指摘されている。この文献に関する研究は非常に多いため、ここでは両写本の翻訳のみを挙げている。

¹³ この部分のドイツ語訳は Leumann (op.cit.: 268-279) を参照。

以此功德來生我所。或造僧祇四方無礙齋講設會供養飯食。修此功德來生我所。或以持戒多聞。修行禪定無漏智慧。以此功德來生我所。或有起塔供養舍利念佛法身。以此功德來生我所。或有厄困貧窮孤獨繫屬於他。王法所加臨當刑戮。作八難業受大苦惱拔濟彼等令得解脫。修此功德來生我所。或有恩愛別離朋黨諍訟極大苦惱。以方便力令得和合。修此功德來生我所。說是語已。稱讚釋迦牟尼佛。善哉善哉。能於五濁惡世。教化如是等百千萬億諸惡眾生。令修善本來生我所。時彌勒佛如是三稱讚釋迦牟尼佛。而說偈言。

忍辱勇猛大導師	能於五濁不善世	教化成熟惡眾生	令彼修行得見佛
荷負眾生受大苦	今入常樂無為處	教彼弟子來我所	我今為汝說四諦
亦說三十七菩提	莊嚴涅槃十二緣	汝等宜當觀無為	入於空寂本無處

說此偈已。復更讚歎彼時眾生於苦惡世能為難事。貪欲瞋恚愚癡迷惑短命人中。能修持戒作諸功德。甚為希有。爾時眾生不識父母沙門婆羅門。不知道法。互相惱害近刀兵劫。深著五欲嫉妬諂佞。曲濁邪偽無憐愍心。更相殺害食肉飲血。不敬師長不識善友。不知報恩。生五濁世不知慚愧。晝夜六時相續作惡不知厭足。純造不善五逆惡聚。魚鱗相次求不知厭。九親諸族不能相濟。善哉善哉釋迦牟尼佛。以大方便深厚慈悲。能於苦惱眾生之中。和顏美色善巧智慧。說誠實語示我當來度脫汝等。如是導師明利智慧。世間希有甚為難遇。深心憐愍惡世眾生。為拔苦惱令得安隱。入第一義甚深法性。釋迦牟尼三阿僧祇劫。為汝等故修行難行苦行。以頭布施。割截耳鼻手足軀體受諸苦惱。為八聖道平等解脫利汝等故。時彌勒佛如是開導安慰無量諸眾生等。令其歡喜。彼時眾生身純是法。心純是法。口常說法。福德智慧之人充滿其中。天人恭敬信受渴仰。時大導師各欲令彼聞於往昔苦惱之事。復作是念。五欲不淨眾苦之本。又能除捨憂惑愁恨。知苦樂法皆是無常。為說色受想行識苦空無常無我。說是語時。九十六億人不受諸法。漏盡意解得阿羅漢。三明六通具八解脫。三十六萬天子。二十萬天女發阿耨多羅三藐三菩提心。天龍八部中。有得須陀洹者。種辟支佛道因緣者。發無上道心者。數甚眾多不可稱計。爾時彌勒佛。與九十六億大比丘眾。并穰佉王八萬四千大比丘眷屬圍繞。如月天子諸星宿從出翅頭末城。還花林園重閣講堂。時閻浮提城邑聚落小王長者。及諸四姓皆悉來集龍花樹下花林園中。爾時世尊重說四諦十二因緣。九十四億人得阿羅漢。他方諸天及八部眾六十四億恒河沙人。發阿耨多羅三藐三菩提心住不退轉。第三大會。九十二億人得阿羅漢。三十四億天龍八部發三菩提心。時彌勒佛說四聖諦深妙法輪。度天人已。將諸聲聞弟子天龍八部一切大眾。入城乞食。無量淨居天眾恭敬從佛入翅頭末城。當入城時。佛現十八種神足。身下水。如摩尼珠。化成光臺照十方界。身上出火。如須彌山流紫金光。現大滿空化成琉璃。大復現小如芥子許。泯然不現。於十方踊於十方沒。令一切人皆如佛身。種種神力無量變現。令有緣者皆得解脫。釋提桓因三十二輔臣與欲界諸天。梵天王與色界諸天。并天子天女。脫天璣瓔珞及以天衣。而散佛上。時諸天衣化成花蓋。諸天妓樂不鼓自鳴。歌詠佛德密雨天花。栴檀雜香供養於佛。街巷道陌堅諸幢幡。燒諸名香其煙若雲。世尊入城時。大梵天王釋提桓因。合掌恭敬以偈讚佛。

正遍知者兩足尊	天人世間無與等	十力世尊甚希有	無上最勝良福田
其供養者生天上	未來解脫住涅槃	稽首無上大精進	稽首慈心大導師

東方天王提頭賴吒。南方天王毘樓勒叉。西方天王毘留博叉。北方天王毘沙門王。與其眷屬恭敬合掌。以清淨心讚歎世尊。

三界無有比	大悲自莊嚴	體解第一義	不見眾生性
及與諸法相	同人空寂性	善住無所有	雖行大精進
無為無足跡	我今稽首禮	慈心大導師	眾生不見佛
長夜受生死	墜墮三惡道	及作女人身	今日佛興世
拔苦施安樂	三惡道已少	女人無諂曲	皆當得止息
具足大涅槃	大悲濟苦者	施樂故出世	本為菩薩時
常施一切樂	不殺不惱他	忍心如大地	我今稽首禮
忍辱大導師	我今稽首禮	慈悲大丈夫	自免生死苦
能拔眾生厄	如火生蓮花	世間無有比	

爾時世尊次第七乞食。將諸比丘還至本處入深禪定。七日七夜寂然不動。彌勒佛弟子色如天色。普皆端正厭生老病死。多聞廣學守護法藏行於禪定。得離諸欲如鳥出殼。

爾時釋提桓因。與欲界諸天子。歡喜踊躍。復說偈言。

世間所歸大導師	慧眼明淨見十方	智力功德勝諸天	名義具足福眾生
願為我等群萌類	將諸弟子詣彼山	供養無惱釋迦師	頭陀第一大弟子
我等應得見過佛	所著袈裟聞遺法	懺悔前身濁惡劫	不善惡業得清淨

爾時彌勒佛。與娑婆世界前身剛強眾生及諸大弟子。俱往耆闍崛山到山下已。安詳徐步登狼跡山。到山頂已舉足大指躡於山根。是時大地十八相動既至山頂彌勒以手兩向擘山如轉輪王開大城門。爾時梵王持天香油灌摩訶迦葉頂。油灌身已擊大捷椎。吹大法蠶。摩訶迦葉即從滅盡定覺。齊整衣服偏袒右肩。右膝著地長跪合掌。持釋迦牟尼佛僧伽梨。授與彌勒而作是言。大師釋迦牟尼多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀。臨涅槃時以此法衣付囑於我。令奉世尊。時諸大眾各白佛言。云何今日此山頂上有人頭蟲。短小醜陋著沙門服。而能禮拜恭敬世尊。時彌勒佛訶諸大弟子莫輕此人。而說偈言。

孔雀有好色	鷹鵝鷄所食	白象無量力	師子子雖小
撮食如塵土	大龍身無量	金翅鳥所搏	人身雖長大
肥白端正好	七寶瓶盛糞	污穢不可堪	此人雖短小
智慧如練金	煩惱習久盡	生死苦無餘	護法故住此
常行頭陀事	天人中最勝	苦行無與等	牟尼兩足尊
遣來至我所	汝等當一心	合掌恭敬禮	

說是偈已告諸比丘。釋迦牟尼世尊。於五濁惡世教化眾生。千二百五十弟子中。頭陀第一身體金色。捨金色歸出家學道。晝夜精進如救頭然。慈悲貧苦下賤眾生。恒福度之為法住世。摩訶迦葉者此人是也。說此語已。一切大眾悉為作禮。

爾時彌勒持釋迦牟尼佛僧伽梨。覆右手不遍纔掩兩指。復覆左手亦掩兩指。諸人怪歎先佛卑小。皆由眾生貪濁憍慢之所致耳。告摩訶迦葉言。汝可現神足并說過去佛所有經法。爾時摩訶迦葉踊

身虛空作十八變。或現大身滿虛空中。大復現小如葶藶子。小復現大。身上出水身下出火。履地如水履水如地坐臥空中身不陷墜。東踊西沒西踊東沒。南踊北沒北踊南沒。邊踊中沒中踊邊沒。上踊下沒下踊上沒。於虛空中化作琉璃窟。承佛神力。以梵音聲說釋迦牟尼佛十二部經。大眾聞已怪未曾有八十億人遠塵離垢。於諸法中不受諸法得阿羅漢。無數天人發菩提心。繞佛三匝還從空下。為佛作禮說有為法皆悉無常。辭佛而退還耆闍崛山本所住處。身上出火入般涅槃。收身舍利山頂起塔。彌勒佛歎言。大迦葉比丘是釋迦牟尼佛於大眾中。常所讚歎頭陀第一通達禪定解脫三昧。是人雖有大神力而無高心。能令眾生得大歡喜。常愍下賤貧苦眾生彌勒佛歎大迦葉骨身言。善哉大神德釋師子大弟子大迦葉。於彼惡世能修其心。爾時摩訶迦葉骨身。即說偈言。

頭陀是寶藏 持戒為甘露 能行頭陀者 必至不死地
持戒得生天 及與涅槃樂

說此偈已。如琉璃水還入塔中。爾時說法之處。廣八十由旬長百由旬。其中人眾若坐若立若近若遠。各見佛在其前獨為說法。彌勒佛住世六萬億歲。憐愍眾生故令得法眼。滅度之後諸天世人闍維佛身。時轉輪王收取舍利。於四天下各起八萬四千塔。正法住世六萬歲。像法二萬歲。汝等宜應勤加精進。發清淨心起諸善業。得見世間燈明彌勒佛身必無疑也。」

(T.14, no. 456, 431c21-434a21)

以上の対応関係から、THT1859 が弥勒經典中に語られる摩訶迦葉による十八變を中心としたものである事を窺う事ができると共に、THT1859 ではそれに先行する弥勒による三度の説法が簡略化されていた可能性も指摘される。仮にこのような推定が正しいならば、弥勒による三度の説法について詳細に述べる一方で、摩訶迦葉による十八變が以下のように 296 詩節でのみ言及される『ザンバスタの書』第 22 章と著しい対照を為すと言う事ができる。

『ザンバスタの書』第 22 章 Strophe 296:

*sthavirā po`balysā namaštā drrai tcīrai tvamdanu jsāte
hamdrauysī hāmāte āgā—śo yame prrāhālye yande*

“The Elder will worship at the Buddha’s feet. Three times he will walk around him in honour. He will travel through the sky. He will perform the *yamakaprātihāryas*.” (Emmerick op.cit.: 334-335)

同一の伝承に由来すると考えられるだけでなく、ほぼ同時代の弥勒信仰の状況を反映すると推定されるトカラ語 B とコートタン語でこのような差異が見られる事は、クチャ地域とコートタン地域における弥勒思想の受容と展開を研究する際に重要な手がかりを与えるが、この点については第三節で改めて検討したい。

2-2. THT1860

2-2-1. 転写と和訳

THT1860 は表裏共に 6 行ずつ書かれており、左から約 5.3cm の位置に紐穴が残存しているが、断片の左右には欠落があり、完全な断片ではない。筆者の研究によれば、この断片についても IDP 及び TITUS 上で公開されている写真では表裏が反対となっており、THT1860 のラベルが貼られている面が裏面に相当する事から、以下ではこの修正を反映させた上で表裏に言及する。当該断片のサイズは高さ 5.7cm・幅 15.4cm であり、両面には罫線が部分的に確認されるが、その間隔は約 0.9cm となっている。なお、a3 には新たな章の冒頭部分である記載が見られるが、a1-2 の部分の韻律は破損による欠落がひどく、韻律を正確に推定する事ができない。後続する部分の韻律は 4 行×14 音節と推定され、残存部分は strophe 1a-6b に相当すると考えられるが、韻文の再建については後に扱う。

[転写]

a

- 1 /// [k]ly(e)w̄sastā^[1] [k̄g]ntwas[a] mā to - {-----} :šā - ///
 2 /// - n̄ta krent preke šle maittreym̄ n̄ä(k)[t](em) {-} [ts]^[2] (ye)[s] p̄aklyew[s](a)^[3] {-----} - {-}
 ttr^[4] ///
 3 /// sarggā wāte || ||^[5] O (n̄a)no n̄äke s̄argga puššampa^[6] ken[e]n[e] šamšalle || k_s(e) ///
 4 /// moš^[7] k(ra)kecce omp̄alsko- O n̄ne šmeñcañ š[e]k [šā]ñ [p̄a]lsko yātaššēñcañ šek
 mamrau[s](kas) ///
 5 /// ts[i] n̄ä[k]tents (n̄)äktem̄n mait(r)eyem̄ cai yäst lka(sk)[e](m̄) {-} [s]ñ(·) k̄sā 1 k_se cai speltkes =
 oroc[e] ///

b

- 1 /// - {-} [ñ] · {-} - y[e]m̄^[9] k_use akšas[k]em̄ pelaik(n)e aknatsantsä k̄arsattsi yāt̄aske^[10] ///
 2 /// [l](·) tsī^[11] ram̄t̄₁ -^[12] ai[s]kem̄ sa[m]sa[r]ššana nak̄anma y[n]e(s̄ ra)[m]tt̄ n(e)rvva(m̄)
 stam̄askem̄ cai lak̄am̄ ce_u mai[t̄](t)[r]e(yem̄) ///
 3 /// - ·k̄ ne šek lašakem̄ re- O ki p̄alsko ke[kts]entsa yā[n̄]k(au)n^[13] k̄astwer speltkesā n̄wona
 nešmye [y]^[14] ///
 4 /// (ta)[ñ]ws(ā) m(o)k̄[šā]ntse ka pelk̄ānā cai O [s]ā[r]tt̄[ī]kem̄^[15] maittreym̄ 4 [k_s]e
 allyeñk̄a[n] onolments šek n̄äs[k]e^[16] ///
 5 /// yäknešca upāsāk̄aññešc wato [a] {-} (·)[i] -^[17] ai · e^[18] epe {-} -- {-} ai ne (·)e - ///
 6 /// - (·)e 5 ke ·[š]ä krenta wāntar[w]a {-----} - {-} (·)ai ///

[注釈]

- (1): この語形は Malzahn (2010: 631-632) 及び Adams (2013: 250-251) では指摘されていないが、筆者の推定が正しいならば、語根 klyaus- ‘to hear, listen to’ の 2sg.pret.act. である。
 (2): この部分は n̄ä(k)[t](em̄ n̄äktem̄)[ts](ā) と推定する事ができるかも知れない。

- (3): この部分は *klyaus-* “to hear” の 2pl.ipv.act. である *ḡaklyew[s](aso)* と再建できるように思われる。
- (4): この部分は (*mai*)*ttr(eye)* と推定する事ができるかも知れない。
- (5): この箇所にかかれた *daṇḍa* には抹消されたような痕跡が見られる。
- (6): この韻律は初出であるが、後続部分から 4 行×14 音節の韻律であったと推定される。
- (7): 語根 *yām-* “to do” の過去分詞・男性複数主格形の *yāmoṣ* が推定されるかも知れない。
- (8): この部分には 7 音節が要求されるが、1 音節多く、8 音節となっている。
- (9): この箇所は (*näkteṃsä*) [*n̄*](*äkteṃ maittre*)*yem* と再建できるかも知れない。ただし、その場合は韻律が要求するよりも 1 音節多く、8 音節を構成する事となる。
- (10): Malzahn (2010: 792) は *yätäske(ntär)* を推定しているが、具体的に *yätäske(ntär)*, *yätäske(nträ)*, *yätäske(ntr)* のいずれであるか不明である。
- (11): この箇所は *läk-* “to see” の inf. である [*l̄*](*ka*)*tsi* と再建できるかも知れない。
- (12): この *akṣara* は [*ṣe*] と読む事ができるかも知れない。
- (13): この語形は初出であるが、*in̄kaum* “during the day” の Archaic Tocharian B の語形である。
- (14): 或いはこの *akṣara* を [*śa*] と読む事ができるかも知れない。
- (15): 第 2 音節の <tt> の母音記号は <e> から <ḍ> に修正された痕跡が見られる。
- (16): ここには *näs[k]e(ntär)* が推定されるが、具体的には *näs[k]e(ntär)*, *näs[k]e(nträ)*, *näs[k]e(ntr)* のいずれであるか不明である。
- (17): この *akṣara* は [*s*] と読む事ができるかも知れない。
- (18): この *akṣara* は [*tn̄je*] と読む事ができるかも知れない。

[和訳]

a

- 1 [...] あなたは聞いた。言葉によって [...] ない [...]
- 2 [...] 良い時に神々の神弥勒と共に [...] あなた方は聞きなさい。弥勒(?) [...]
- 3 [...] の章の後半 [...] || さて今、(この)章は *Puṣṣāmpa* の韻律で数えられるべきである^[1]。
|| [...] する者 [...]
- 4 [...] 汚れた [...] を [...] して、常に瞑想を行い、自らの心を抑制し、常に厭世感を抱き、
[...] する者は、
- 5 神々の神弥勒及び断崖を [...] によって(?) 見るであろう。//1// 大いなる努力によって [...] する者、 [...]
- 6 [...] 諸々の煩惱を伴う輪廻から逃れるために^[2] [...]

b

- 1 [...] する者は、神々の神弥勒に(?) [...] 愚かな人々に知るべき法を説き [...] を飾り [...]
- 2 [...] 輪廻の諸々の誤謬を示す(?) かの如く、涅槃を目前に将来するかの如き者は弥勒に会うだろう。 [...]
- 3 [...] 常に努力し、言葉・心・身体を以て、昼夜努力によって、新しい、悪しき噂^[3] [...]
- 4 [...] 愛情によって解脱のために [...] する者は、励ます者である弥勒に(会うだろう)^[4]。//4//

常に他の衆生の [...] を求め [...]

5 [...] の態度を目指して、また優婆塞たる事を目指して [...] 若しくは [...]

6 [...] //5// 諸々の善行 [...]

[注釈]

- (1): Malzahn (2010: 926) で指摘されるように、ここには語根 *šäms-* “to count”の ger.である *šämsälle* が在証されるが、トカラ語 B 断片 B99a2 などに見られる場面設定の指示が ger.I を使用している事及び文脈から ger.I と考えられる。なお、トカラ語文献では通常韻律を表す名詞の処格で韻律が明示されるが、B514a4, b9 及びこの箇所に見えるように韻律名の後に *kene* “tune, melody, meter”の単数処格 *kenene* を伴った形式も確認される。また、荻原 (2013: 377)で指摘したように、このような *kenene* を伴う韻律指定はキジル石窟第 213 窟の Archaic Tocharian B で書かれた韻文にも確認されるが、これら *kenene* を伴う韻律指定の例は Archaic Tocharian B で書かれた資料にのみ確認される点は、トカラ語 B の韻文の韻律指定が「韻律名 + *kenene*」→「韻律名の処格」へと変化した事を示唆し、韻律名の処格での指定には *kene* “tune, melody, meter”が含意されていた可能性を窺わせる。
- (2): Adams (2013: 428-429) に指摘されるように、動詞の inf.の属格形を伴う *pelkiñ* は目的を表すが、ここでは属格形ではなく通格形となっている。
- (3): Adams (op.cit.: 287) は当該箇所に在証される *ñwona* を“female novices, neophytes”と解釈しているが、この解釈の根拠は示されておらず、また文脈からも確実な根拠を得られないため、ここでは従来の“new”の解釈を採用した。
- (4): この箇所は断片が破損しているだけでなく、書写の誤りも含まれており、正確な語形を確定しにくい、ここでは *[s]ä[r]u[ī]kem* と解読した。この語は hapax であるが、筆者はこの語が Toch.B: *šārto** “encouragement(?)”に行為者名詞を派生する suffix である *-ike* が付加された派生語であり、後続する *maitreyem* “Maitreya”と同様に斜格形であると見做した。なお、この部分は先行する b2 とは異なり、動詞 *läk-* “to see”が省略されている。

2-2-2. 韻文の再建

本節では THT1860 の韻文を再建する。前節で指摘したように、当該断片は a1-2 と a3-b6 では異なる章に属しており、後者は 4 行×14 音節の韻律で書かれていたと推定される。この推定が正しいならば、THT1860a3-b6 には strophe 1a-6b が与えられており、以下のように韻文を再建する事ができる。なお、韻律を推定できない THT1860a1-2 については、ここでは扱わない。

THT1860 [4×14 (= 7/7)]: 1a-6b

<a3> *k_ws(e)* { - - - - - | - - - } <a4> *moṣ k(ra)kecce* |
ompälskoñne ṣmeñcañ ṣ[e]k | *[šä]ñ [pä]lsko yätäṣṣeñcañ* |
šek mamrau[s](kaṣ) { - - - | - - - - - } <a5> *ts[i]* |
ñä[k]tents (ñ)äktemm maitt(r)eyem | *cai yäst lka(sk)[e](m)* { - } *[s]ñ(·) ksä //1//*

k₁se cai speltkes = orocc[e] | {- - - - - |}
 {- - - - - } <a6> ·(·)[ā] | - s(·) [m](·)[i] {- - } *yä* ·[e] |
[k₁s]e pelkñ[ä] tsä[l]p(at)[si]sa | *samsärmeṃ kleśänma[sä]* |
 {- - - - - } <b1> - { | - } [ñ]· {- - } - *y[e]ṃ* (//2//)

k₁₀se aksäs[k]eṃ pelaik(n)e | *aknatsantsä kärsattsi* |
yätäske {- - - - | - - - - - |}
 {- } <b2> [l](·)· *tsi ramt - ai[s]keṃ* | *sa[m]sa[r]ṣṣana nakänma* |
y[n]e(s ra)[m]tt n(e)rvva(m) stämäskem | *cai läkam ce_u mait[r]e(yeṃ* //3//)

{- - - - - } | <b3> - ·k· *ne šek laläskem* |
reki pälsko ke[kts]entsa | *yä[ñ]k(au)n kästwer speltkesä* |
ñwona neṣmye [y]· {- - | - - - - } <b4> (tä)[ñ]ws(ā) |
m(o)k[šä]ntse ka pelkñä | *cai [š]ä[r]t[t]i]keṃ maittreyeṃ* //4//

[k₁s]e allyenkä[n] onolments | *šek näs[k]e* {- - - - |}
 {- - - } <b5> *yäkneṣca* | *upāsākāñṣe wato* |
[a] {- - } ·(·)[i] - ·ai ·e | *epe* {- } - - {- - } |
 ·ai *ne* ·(·)e - {- - - | - - - - } <b6> - ·(·)e //5//

ke [š]ä krenta wäntär[w]a | {- - - - - } - |
 {- } ·(·)ai {- - - - - | - - - - - } |

2-2-3. 内容比定

上で示したように、THT1860にはどのような行いをすれば弥勒に会う事ができるかが説かれている。2-1-3 節で THT1859 のパラレルとして提示した『佛説彌勒大成佛經』にも、どのような行いをした人々が弥勒に会う事ができたかについて弥勒の説法中で語られているが(2-1-3 節引用中の波線部分)、この部分に対応する記述を含む梵文《Maitreyavyākaraṇa》では語根 *ā-gam-* “to come”の過去分詞 *āgata-*で (Lévi 1932: 387-388)、また『ザンバスタの書』第 22 章 221-232 詩節 (Emmerick 1968: 320-323) では動詞 *hīs-* “to come”の過去語幹 *āta-*で善行を行った人々が弥勒の下へと訪れた事が描写されており、THT1860 のように未来について述べられてはいない事から、THT1860 が弥勒による第一回目の説法に対応するものでない事は明らかである¹⁴。この点

¹⁴ 熊本 (forhc: 5) で指摘されるように、梵語は動詞の未来形で、未来形を欠くコータン語では現在形で状況の描写が為されている。一方、同じく未来形を欠くトカラ語 B では、THT1859 において弥勒下生に関する状況の描写が接続法で語られる一方、THT1860a3 以降の部分では、a5 で現在形が使用されている一例を除けば、定動詞は従属節では現在形、主節では接続法となっている。なお、この用法は Peyrot (2013: 386-389) で明らかにさ

を考慮に入れると、THT1860 は仏陀によって弥勒下生が語られた後の部分に対応すると推定される。即ち、漢訳『佛説彌勒大成佛經』「汝等宜應勤加精進。發清淨心起諸善業。得見世間燈明彌勒佛身必無疑也。」(T.14, no. 456, 434a19-21) 及び梵文《*Maitreyavyākaraṇa*》: *prasādayitvā cittāni tasmin śākyamunau jine | tato drakṣyatha maitreyaṃ sambuddhaṃ dvipadottamam* (Lévi op.cit.: 389) に関連する可能性を指摘する事ができるが、仮にこの推定が正しいならば、THT1860 は『佛説彌勒大成佛經』とは異なり、この部分の内容が大幅に増補されている事となる¹⁵。

3. 中央アジア仏教史における THT1859-1860 の位置付け

本稿で扱ったドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1859-1860 は弥勒經典に比定された。トカラ語 B 文献中、これまで弥勒に言及する断片が数点知られていたが、他言語による弥勒関係文献と体系的な比較を許す断片は知られておらず¹⁶、両断片はクチャ仏教における弥勒信仰について研究する重要な手がかりを提供する。漢訳仏典中、弥勒經典と称される仏典で THT1859-1860 に最も近い内容を持つ仏典は、鳩摩羅什によって漢訳された『佛説彌勒大成佛經』である。そのインド語原典がどの地域で成立したかは不明であるにせよ、彼が仏典漢訳に従事した時代或いはそれ以前に成立していたはずであるため、その原典は 5 世紀前半までには成立していたと考えられる。また、コータン語『ザンバスタの書』の成立年代も同じく 5 世紀とされるだけでなく¹⁷、両断片が反映する Archaic Tocharian B の時代も 4-6 世紀とされる。このように考えるなら、これら三つの資料の内、『ザンバスタの書』と THT1859-1860 はほぼ同時代の資料と考える事ができ、5 世紀頃の中央アジア地域における弥勒信仰の受容と展開を示す資料であると言える。ただ、THT1859-1860 に先行する folio が残っておらず、両断片に先行する部分がどのような内容を有していたかは不明であり、『佛説彌勒大成佛經』及び『ザンバスタの書』第 22 章と体系的な比較を行う事ができないため、ここでは THT1859-1860 から窺う事ができる内容を基に中央アジア仏教史における両断片の位置付けを検討したい。

ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1859-1860 は弥勒經典の終りに近い部分、即ち弥勒が出家し

れたトカラ語の接続法の用法と一致するが、THT1860 は Peyrot の研究では利用されていない。

¹⁵ また一方で、別の対応の可能性を指摘する事も可能であると思われる。即ち、漢訳及び梵文には見られないが、熊本 (op.cit.: 9) で指摘されるように、『ザンバスタの書』第 22 章及びトカラ語 A《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》と古代ウイグル語《*Maitrisimit nom bitig*》では、弥勒による摩訶迦葉の訪問が語られた後に“glimpse of the hell”と同論文で称される場面が描かれており、さらにこの場面は『ザンバスタの書』に見られる極めて簡単な描写が、《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》と《*Maitrisimit nom bitig*》では 6 章分に拡大されている。この場面の内容は弥勒によって放たれた光線が地獄で苦しみに喘ぐ者達に及ぶというもので、『ザンバスタの書』ではそれに続いてどのような悪行を行った者は弥勒に会う事ができないかが語られているが、その内 306 詩節には以下のような記述が見られ、THT1860 の内容に関連していると見做す事ができるかも知れない。

kye mokṣi tūma barīndi balyā vajsitā're ttu kālu

avāyuvu'ṣṭāna cavī—ndā biṣyau parsīndi dukhyau jsa

“Those who bear the seed of deliverance will behold the Buddha at that time. Though in the Apāyas, they will be reborn.”

(Emmerick op.cit.: 336-337)

ただし、THT1860 には地獄に関する言及は見られず、また弥勒に会う事ができる善行を述べている点が、この内容比定にとって困難を齎すと言える。

¹⁶ トカラ語 B 文献は、この点で百点を超える弥勒関係の断片が確認されているトカラ語 A とは著しい対照を為している。

¹⁷ 『ザンバスタの書』の成立年代については、Maggi (2004) を参照。

た人々を伴い *Kukūrapāda* 山に摩訶迦葉を訪れ、摩訶迦葉が彼らに十八変を示す場面以降に対応する。『佛説彌勒大成佛經』及び『ザンバスタの書』第 22 章でも同様にこの物語が語られるが、先に 2-1-3 節で言及したように『ザンバスタの書』第 22 章では摩訶迦葉による十八変に関する描写は 296 詩節のみであり、『佛説彌勒大成佛經』及び THT1859 と比較して簡略化されたものとなっている。一方、トカラ語 B 断片 THT1859 については、弥勒による摩訶迦葉の訪問に先行する重要な場面である弥勒による三度の説法に相当する部分が非常に簡略されている可能性が指摘された。『ザンバスタの書』第 22 章が弥勒による三度の説法について『佛説彌勒大成佛經』とほぼ同一の内容を語る点で、THT1859 は『佛説彌勒大成佛經』及び『ザンバスタの書』と著しい対照を為している¹⁸。

また、THT1860 では弥勒に会うための善行について語られていた。先に 2-2-3 節で推定したように、この断片が弥勒による摩訶迦葉の訪問と摩訶迦葉による十八変に続く部分に対応するならば、当該断片は『佛説彌勒大成佛經』及び『ザンバスタの書』とは異なり、弥勒に巡り合うために行うべき善行に関連する内容が大幅に増補されていると考える事ができる¹⁹。

弥勒經典の終りに近い部分のみを残す二断片から性急に結論を導く事は控えるべきではあるが、ここで扱った THT1859-1860 からは、弥勒の事績が重視されていたというよりも、摩訶迦葉を媒介とした弥勒による仏法の継受及び如何にすれば仏法を継承した弥勒に会う事ができるかという点に力点を置いた内容となっているように推定される。筆者の推定が正しいならば、THT1859-1860 は、弥勒の事績を体系的に語る『佛説彌勒大成佛經』及び『ザンバスタの書』第 22 章、さらにはトカラ語 A《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》や古代ウイグル語《*Maitrisimit nom bitig*》とは異なり、弥勒の事績そのものについては簡略化された内容を有しており、編纂方針及び思想的背景が異なっていた可能性も指摘する事ができる²⁰。

さらに、上記の点に加えて、THT1859b5 には仏陀が涅槃してから「57 億 6 百万年」という記載が見られる点も指摘しておきたい。一般的に弥勒の下生は仏陀の涅槃から 56 億 7 千万年後とされており、THT1859b5 の記述とは一致しない。これが基づいた伝承の相違に由来するものか、或いはクチャ仏教における独自の発展かという点については判断できないが、この相違は弥勒信仰の展開の一過程を示すものと理解され得る。

クチャにおける弥勒信仰については、主としてキジルなどの石窟に描かれた壁画や大仏を利用した研究が為されてきたが、この地域の言語であったトカラ語 B による資料は研究者には殆ど知られていないため、これまで利用される事がなかった。その結果、従来の研究では、クチ

¹⁸ 『増壹阿含經』「十不善品(三)」と『佛説彌勒下生佛經』では摩訶迦葉による十八変は語られておらず、この点では《*Maitreyāvādāna*》と同様である。また、トカラ語 A《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》及び古代ウイグル語《*Maitrisimit nom bitig*》では弥勒による摩訶迦葉の訪問は説かれているが、摩訶迦葉による十八変の有無については写本の欠落により判断できない。なお、《*Maitreyavyākaraṇa*》及び『佛説彌勒下生成佛經』には、弥勒による摩訶迦葉の訪問は説かれていない。

¹⁹ 関連する内容は B274 でも語られている。この断片については Pinault (2008: 269-280) を参照。

²⁰ トカラ語 A《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》で語られる仏名が『根本説一切有部毘奈耶藥事』のものとはほぼ一致する事から、トカラ語 A《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》及び古代ウイグル語《*Maitrisimit nom bitig*》には、所謂根本説一切有部の系統による影響が考えられる。『根本説一切有部毘奈耶藥事』のものとはほぼ一致する《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》に見られる仏名については、荻原 (forthc.) を参照。

チャ地域における弥勒信仰は石窟に描かれた壁画が反映する上生信仰の文脈で語られる事が多かったが、THT1859-1860 の二点の断片は下生信仰を反映していると思われるため、仏教史における弥勒信仰の展開全体におけるクチャ仏教の位置付けについては再検討を行う必要があると言えよう。

結論

本稿では、これまで体系的な解釈と内容比定及び他言語による文献との比較が課題として残されていたドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1859-1860 を扱った。ここでは主として漢訳『佛説彌勒大成佛經』を利用して、両断片が弥勒下生に関する物語の終りに近い部分、即ち弥勒が出家した人々を伴い *Kukūrapāda* 山に摩訶迦葉を訪れ、摩訶迦葉が彼らに十八変を示す場面以降に対応する事を明らかにすると同時に、『佛説彌勒大成佛經』及びコータン語『ザンバスタの書』第22章、さらにはトカラ語 A《*Maitreyasamiti-nāṭaka*》や古代ウイグル語《*Maitrisimit nom bitig*》が弥勒の事績や説法を体系的に語るのとは異なり、当該の二断片では摩訶迦葉による十八変に関する描写と将来弥勒に巡り合うために必要な善行の説明が主要な内容を構成している点を指摘した。この点から、THT1859-1860 は弥勒の事績そのものではなく、摩訶迦葉を媒介とした弥勒による仏法の継承及び弥勒に会う事ができる善行の説明という点を重視した内容であると推定され、梵文も含めて既知の弥勒関係文献とはかなり異なった内容を有していると言う事ができる。

これまでクチャにおける弥勒信仰は上生信仰を反映する壁画のみが知られ、大仏以外には下生信仰を示す明確な資料は確認されていなかったが、本稿で扱った THT1859-1860 はクチャに下生信仰も存在していた点を文献学的に証明する事ができるだけでなく、弥勒信仰の展開全体をより詳細に研究する材料を提供する事となる。

尤も、この二断片が5世紀頃のクチャにおける弥勒信仰の受容や展開を代表するわけでない事は言うまでもないが、中央アジアにおける弥勒信仰の受容と展開の一端を示す資料である事に違いはなく、特に他言語による弥勒関係文献と体系的な比較を許す点及び従来知られていなかったクチャ地域における弥勒下生信仰の文献学的資料の発見としての意義は大きく、今後クチャ地域における弥勒下生信仰の美術史・考古学・歴史学研究にとって重要な資料であると言える。今後もトカラ語 B 文献中に見られる弥勒関連資料の調査を進めると共に、他言語資料及び考古学・美術史・歴史学研究の成果も組み合わせ、中央アジア地域における弥勒信仰の受容と展開を仏教史全体の観点から跡付けて行きたい。

参考文献

- Adams, Douglas Q. (2013) *A Dictionary of Tocharian B, revised and greatly enlarged*. Amsterdam - New York: Rodopi.
- Bodhi, Bhikkhu (2000) *The connected discourses of the Buddha: A New Translation of the Saṃyutta*

- Nikāya*. Volume I. Boston: Wisdom Publications.
- DN = *Dīgha-Nikāya*.
- DN III = Carpenter, J. Estlin and D. Litt (2006 [1911]) *Dīgha-Nikāya*. Vol. III. Lancaster: Pali Text Society.
- Edgerton, Franklin (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit grammar and dictionary*. 2 vols. New Haven: Yale University Press.
- Emmerick, R. E. (1968) *Book of Zambasta*. London: Oxford University Press.
- 耿世民 (2008) 『回鹘文哈密本《弥勒会见记》研究』北京: 民族大学出版社.
- Hartmann, Jens-Uwe (2006) *Maitreyavyākaraṇa*. In: Jens Braarvig (ed.) *Manuscripts in the Schøyen Collection. Buddhist manuscripts*. Vol. III. Oslo: Hermes Publishing, 7-9.
- IDP = <http://idp.bl.uk/>
- Karashima Seishi and Margarita I. Vorobyova-Desyatovskaya (2015) *Buddhist manuscripts from Central Asia: The St. Petersburg Sanskrit fragments*. Volume I. Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University, 145-523.
- 熊本裕 (forthc.) *The Maitreya-samiti and Khotanese*.
See http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/~hkum/works_j.html
- Leumann, Ernst (1919) *Maitreya-samiti, das Zukunftsideal der Buddhisten. Die nordarische Schilderung in Text und Übersetzung*. Straßburg: Verlag von Karl J. Trübner.
- Lévi, Sylvain (1932) *Maitreya le Consolateur. Études d'orientalisme publiées par le Musée Guimet à la mémoire de Raymonde Linossier*. Vol. II. Paris: E. Leroux, 355-402.
- Maggi, Mauro (2004) The Manuscript T III S 16: Its importance for the history of Khotanese literature. In: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.): *Turfan revisited - The first century of research into the arts and cultures of the Silk Road*. Berlin: Dietrich Reimer, 184-190.
- Malzahn, Melanie (2007) The most archaic manuscripts of Tocharian B and the varieties of the Tocharian B language. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta tocharica*. Heidelberg: Winter, 255-297.
- Malzahn, Melanie (2010) *The Tocharian verbal system*. Leiden: Brill.
- 荻原裕敏 (2013) 「略論龜茲石窟現存古代期龜茲語題記」『敦煌吐魯番研究』第十三卷: 371-386.
- 荻原裕敏 (forthc.) 「吐火羅語文獻所見佛名系列-以出土佛典与庫木吐喇窟群区第 34 窟榜題為例-」『西域文史』第九輯.
- Ogihara Hirotooshi and Georges-Jean Pinault (2010) Un fragment de planchette de bois en tokharien B. *Journal Asiatique* 298.1: 173-202.
- Peyrot, Michaël (2008) *Variation and change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.
- Peyrot, Michaël (2013) *The Tocharian subjunctive: a study in syntax and verbal stem formation*. Leiden: Brill.
- Pinault, Georges-Jean (1997) Restitution du *Maitreyasamiti-nāṭaka* en tokharien A: Bilan provisoire et

- recherches complémentaires sur l'acte XXVI. *Tocharian and Indo-European Studies* 8, 189-240.
- Pinault, Georges-Jean (2008) *Chrestomathie tokharienne: textes et grammaire*. Leuven-Paris: Peeters.
- Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1921) *Tocharische Sprachreste. I. Band: Die Texte, A. Transkription; B. Tafeln*, Berlin-Leipzig: de Gruyter, 1921.
- SN = *Samyutta-Nikāya*.
- SN II = Feer, M. Léon (2000 [1881]) *Samyutta-Nikāya*. Part II: Nidāna-Vagga. Oxford: Pali Text Society.
- T. = 『大正新脩大藏經』
- Tamai Tatsushi (2011) *Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen*. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- Tekin, Şinasi (1980) *Maitrisimit nom bitig. Die uigurische Übersetzung eines Werkes der buddhistischen Vaibhāṣika-Schule*. Berlin: Akademie Verlag.
- TITUS = *Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien*, Tocharian Manuscripts from the Berlin Turfan Collection, digitized images and texts.
- See <http://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/texte/tocharic/tht.htm>
- Vaidya, P. L. (1959) *Divyāvadāna* (Buddhist Sanskrit Texts, No. 20). Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Walshe, Maurice (1995) *The long discourses of the Buddha: A translation of the Dīgha Nikāya*. Boston: Wisdom Publications.

Tocharian B Index:

所蔵番号に含まれる THT は省略し、断片の欠落などにより語形を確定できないものには、在証される箇所の記載の後に*を、また語義不明であるとしたものには疑問符を附している。なお、見出し語は Adams (2013) による。

<i>akāše</i> “sky, air”	sg.loc.: <i>akašne</i>	1859b1
<i>aknātsa</i> “foolish, stupid”	pl.gen.: <i>aknatsantsä</i>	1860b1
	3sg.subj.act.: <i>akšäm</i>	1859b3
<i>ajane</i> “?”		1859b4*
<i>ate</i> “away” (adv.)	<i>ate</i>	1859a2
<i>ayāttaite</i> “untamable”	m.sg.nom.: <i>ayāttaite</i>	1859a2
<i>allek</i> “other”	m.pl.obl.: <i>allyeñkän</i>	1860b4
	f.pl.obl.: <i>allomkna</i>	1859b5*
<i>ākteke</i> “wonderful, astonishing” (indecl.)	<i>akteke</i>	1859b3
<i>āks-</i> “to proclaim, instruct”	3pl.prs.act.: <i>aksäskem</i>	1860b1
<i>āntse</i> “shoulder”	du.abl.: <i>añntsnemem</i>	1859a5
<i>ālp-</i> “to touch, stroke”	3sg.subj.act.: <i>alpañ</i>	1859b2
<i>āsce</i> “head”	sg.obl.: <i>ašca</i>	1859a3
<i>inkaum</i> “by day, during the day” (adverb)	<i>yänkaun</i>	1860b3*
<i>iprer</i> “sky, air”	sg.obl.: <i>iprerä</i>	1859a4
	sg.loc.: <i>iprerne</i>	1859a3
	sg.loc.: <i>yprernne</i>	1859b1*
<i>upāsākāññe</i> “laity”	sg.all.: <i>upāsākāññešc</i>	1860b5
<i>enk-</i> “to take, seize”	3sg.subj.mid.: <i>enkrä</i>	1859b2
<i>enkäl</i> “passion”	sg.obl.: <i>enkäl</i>	1859a3
<i>entwe</i> “then, thereupon” (conj.)	<i>entwe</i>	1859b2
<i>epe</i> “or” (conj.)	<i>epe</i>	1860b5
<i>ai-</i> “to give”	3pl.prs.act.: <i>aiskem</i>	1860b2
	3sg.subj.act.: <i>aiñ</i>	1859b3
<i>oñkipše</i> “shameless”	m.sg.nom.: <i>oñkipše</i>	1859a2
<i>onolme</i> “creature, living being”	pl.gen.: <i>onolments</i>	1860b4
<i>ompalskoññe</i> “meditation”	sg.obl.: <i>ompälskoññe</i>	1860a4
<i>orotstse</i> “great, big”	m.sg.nom.: <i>orotse</i>	1859b4
	m.sg.obl.: <i>orocce</i>	1860a5
<i>ausa</i> “?”		1859a2
<i>ka</i> “just” (emphasizing particle)	<i>ka</i>	1859a4, 1860b4
	<i>kka</i>	1859b2
<i>kante</i> “hundred”	sg.obl.: <i>känte</i>	1859b5
<i>kantwo</i> “tongue, language”	sg.perl.: <i>käntwasa</i>	1860a1

<i>kartse</i> “good”	m.sg.obl.: <i>krent</i>	1860a2
	f.pl.nom.-obl.: <i>krenta</i>	1860b6
<i>kāšyape</i> “Kāšyapa”	sg.nom.: <i>kašyape</i>	1859b1*, b3, b4
	pl.nom.: <i>kašyapi</i>	1859a4, b2
<i>kärs-</i> “to know, understand”	inf.: <i>kärsattsi</i>	1860b1
	absol.: <i>kärsormem</i>	1859a2
<i>käly-/stäm-</i> “to stay, stand”	prs.part.mid.: <i>klyemane</i>	1859a6
	3pl.subj.act.: <i>stāmaṃ</i>	1859b2
“(K) to establish, fix”	3pl.prs.act.: <i>stämäskem</i>	1860b2
<i>kästwer</i> “at night” (adv.)	<i>kästwer</i>	1860b3
<i>kukūrapādä</i> “name of a mountain”	nom.-obl.: <i>kukūrapādä</i>	1859a3
<i>k_use</i> “who, which” (interr.-rel.pron.)	nom.: <i>k_use</i>	1859a1*, 1860a3*, a5, a6*, b1*, b4*
	obl.: <i>k_uce</i>	1859b5
<i>kektseñe</i> “body”	sg.obl.: <i>kektseñä</i>	1859b5
	sg.perl.: <i>kektsentša</i>	1860b3
<i>kem</i> “earth, ground”	sg.perl.(?): <i>kentsänts</i>	1859a3
	sg.perl.: <i>tkentsa</i>	1859b2
	sg.loc.: <i>kenne</i>	1859b1
<i>kene</i> “melody, tune”	sg.loc.: <i>kenene</i>	1860a3*
<i>keš</i> “number, count”	sg.obl.: <i>keš</i>	1859a2
<i>koṭ</i> “ten million”	pl.obl.: <i>kodyänma</i>	1859a2*, b5*
<i>kauc</i> “high, up, above” (adv.)	<i>ke_uc</i>	1859a4
<i>kaum</i> “sun”	sg.obl.: <i>kaun</i>	1859b2
<i>kraketstse</i> “dirty”	m.sg.obl.: <i>krakecce</i>	1860a4*
<i>kraupe</i> “group”	sg.gen.: <i>krewpentse</i>	1859b3
<i>klutk-</i> “(K) to make, change”	3sg.subj.act.: <i>klutkaššämme</i>	1859b3
<i>kleš</i> “affliction, pain”	pl.perl.: <i>klešänmasä</i>	1860a6*
<i>klyaus-</i> “to hear, listen to”	2sg.pret.act.: <i>klyewšastä</i>	1860a1*
	2pl.impv.act.: <i>päklyewšaso</i>	1860a2*
<i>kwäntsam</i> “?”		1859b6*
<i>kwäntsän</i> “?”		1859b6
<i>kwīpe</i> “shame”	sg.obl.: <i>kwīpe</i>	1859a2
<i>kwri</i> “if” (conj.)	<i>kr_ui</i>	1859b6
<i>caṅkramit</i> “promenaded”	<i>caṅkramit</i>	1859a6*
<i>candaṃšše</i> “prtng to sandalwood (tree)”	f.pl.nom.-obl.: <i>candaṃššana</i>	1859b4
<i>cowai</i> (particle used in <i>cowai tärk-</i> “to rob”)	<i>cowai</i>	1859a1
<i>ñake</i> “now” (adverb)	<i>ñake</i>	1860a3
<i>ñakte</i> “god”	sg.obl.: <i>ñakteṃ</i>	1860a2*

	sg.obl.: <i>ñäkteṃn</i>	1860a5
	pl.gen.: <i>ñäktents</i>	1860a5
<i>ñäkciye</i> “divine, heavenly”	m.sg.obl.: <i>ñäkciye</i>	1859a4
<i>ñäsk-</i> “to demand, require”	3pl.prs.mid.: <i>ñäskentär</i>	1860b4*
<i>ñuwe</i> “new”	f.pl.nom.-obl.: <i>ñwona</i>	1860b3
<i>ñem</i> “name”	sg.nom.: <i>ñem</i>	1859b4
<i>tañkw</i> “love”	sg.perl.: <i>tänwsā</i>	1860b4*
<i>tärk-</i> “to emit, give up, let, go”	3pl.prs.mid.: <i>tärkänanträ</i>	1859a1
	3pl.subj.mid.: <i>tärkamtär</i>	1859a4*, a5
	3sg.pret.act.: <i>cārka</i>	1859b5
<i>t_umāne</i> “ten thousand”	sg.obl.: <i>tmane</i>	1859b5
<i>tuwe</i> “you”	pl.nom.: <i>yes</i>	1860a2*
<i>tot</i> “so much”	<i>tot</i>	1859a2
<i>nano</i> “again” (adverb)	<i>nāno</i>	1859b1, 1860a3*
<i>nāki</i> “fault, error”	pl.obl.: <i>nakänma</i>	1860b2
<i>nervām</i> “extinction”	obl.: <i>nervvam</i>	1860b2*
<i>nes-</i> “to be, become”	3sg.impf.act.: <i>ṣe_i</i>	1859b4
	3pl.subj.act.: <i>tākaṃ</i>	1859b1*
<i>nai</i> “indeed, then”	<i>nai</i>	1859a5
<i>no</i> “but, then”	<i>no</i>	1859a2
	<i>nmo</i>	1859a5
<i>palsko</i> “spirit, mind”	sg.obl.: <i>pälsko</i>	1860a4, b3
<i>pākri</i> “obvious, clear” (indecl.)	<i>pākri</i>	1859b1*
<i>pikul</i> “year”	pl.obl.: <i>pikwāla</i>	1859b5
<i>piśāka</i> “fifty”	obl.: <i>piśaka</i>	1859b5
<i>pūdñäkte</i> “Buddha”	sg.nom.-obl.: <i>pudñäkte</i>	1859b6*
	sg.gen.: <i>pudñäktentse</i>	1859b4*
<i>pūwar</i> “fire”	sg.nom.: <i>pūwar</i>	1859a5
	sg.nom.: <i>pūwar</i>	1859a5, a5
<i>puṣṣāmpa</i> “name of a meter”	<i>puṣṣāmpa</i>	1860a3
<i>perne</i> “glory”	obl.: <i>perne</i>	1859a2
<i>pelaikne</i> “law”	sg.obl.: <i>pelaikne</i>	1860b1
<i>pelkiñ</i> “for the sake of, in order to”	<i>pelkiñä</i>	1860a6, b4
<i>paiyye</i> “foot”	du.abl.: <i>peynemem</i>	1859a5, a5
<i>po</i> “all”	<i>po</i>	1859a4, a4, b6
<i>pratihari*</i> “miracle”	pl.obl.: <i>pratiharinta</i>	1859b3*
<i>prutk-</i> “(K) to fill up”	3sg.subj.act.: <i>prutkaṣṣām</i>	1859a4
<i>preke</i> “time, occasion”	sg.obl.: <i>preke</i>	1860a2
<i>mant</i> “thus”	<i>mänt</i>	1859a2

<i>mā</i> “not”	<i>mā</i>	1860a1
<i>mārtk-</i> “to shave”	3pl.subj.mid.: <i>mārtkantr</i>	1859a3
<i>meñe</i> “moon”	sg.obl.: <i>meño</i>	1859b2
<i>maitreye</i> “Maitreya”	nom.: <i>maitreye</i>	1859b3
	obl.: <i>maittreyem</i>	1860a2, a5, b2*, b4
<i>mokş</i> “deliverance”	sg.gen.: <i>mokşāntse</i>	1860b4*
<i>mrausk-</i> “to feel an aversion to the world”	3pl.subj.mid.: <i>mrauskanträ</i>	1859a2
	pret.prt.m.pl.nom.:	
	<i>mamrauskaş</i>	1860a4*
<i>yakne</i> “way, manner”	sg.all.: <i>yäkneşca</i>	1860b5
<i>yast</i> “precipice”	sg.nom.: <i>yäst</i>	1859a3*
	sg.obl.: <i>yäst</i>	1859b3, 1860a5
<i>yāt-</i> “to tame, control”	prs.part.act.pl.nom.:	
	<i>yātäşşeñcañ</i>	1860a4
<i>yät-</i> “to decorate, adorn”	3pl.prs.mid.: <i>yätäskentär</i>	1860b1*
<i>yäp-</i> “to enter”	3pl.subj.act.: <i>yäpäm</i>	1859b1
<i>yerkwanto</i> “wheel”	du.obl.: <i>yerkwāntane</i>	1859b2
<i>ynes</i> “manifestly”	<i>ynes</i>	1860b2*
<i>ywārc</i> “in the air”	<i>ywarc</i>	1859a6
	<i>ywarcco</i>	1859a6*
	<i>ywārcco</i>	1859a6
<i>ysāşşe</i> “golden”	du.obl.: <i>ysaşşene</i>	1859b2
<i>ramt</i> “as, as if”	<i>ramt</i>	1859a5, 1860b2
	<i>ramtä</i>	1859b1
	<i>ramtt</i>	1859a3, a4, b2, 1860b2*
<i>reki</i> “word”	sg.obl.: <i>reki</i>	1860b3
<i>lakle</i> “pain, suffering”	sg.loc.: <i>läklene</i>	1859a3*
<i>läl-</i> “to make an effort”	3pl.prs.act.: <i>laläskem</i>	1860b3
<i>läk-</i> “to see”	3pl.prs.act.: <i>lkaskem</i>	1860a5
	3sg.subj.mid.: <i>lkaträ</i>	1859b1
	3pl.subj.act.: <i>läkam</i>	1860b2
	3pl.subj.mid.: <i>lkānträ</i>	1859a4
	Inf.: <i>lkatsi</i>	1859b3*
<i>lät-</i> “to emerge”	3sg.subj.act.: <i>läm</i>	1859a3
	3sg.subj.act.: <i>länme</i>	1859a5
<i>lyäk-</i> “to lie, lie down”	prs.part.mid.: <i>lykemanē</i>	1859a6
<i>wate</i> “second”	m.sg.nom.: <i>wäte</i>	1860a3
<i>wato</i> “again (?)”	<i>wato</i>	1860b5

<i>war</i> “water”	sg.nom.: <i>wār</i>	1859a5
	sg.loc.: <i>wārñne</i>	1859b1
<i>warñai</i> “beginning with”	<i>wārññai</i>	1859a4
<i>walo</i> “king”	sg.nom.: <i>wālo</i>	1859a3
<i>wāl-</i> “to cover, conceal”	3sg.subj.act.: <i>wālaṃ</i>	1859a4
<i>wāntare</i> “thing, affair”	pl.nom.-obl.: <i>wāntārwa</i>	1860b6
<i>śale</i> “with”	<i>śle</i>	1860a2
<i>śākyamuni</i> “Śākyamuni”	gen.: <i>śākyamūniñ</i>	1859b4
<i>śaiṣṣe</i> “world”	sg.perl.: <i>śaiṣṣesa</i>	1859a4
<i>śaumo</i> “man, person”	pl.gen.: <i>śamnants</i>	1859b3
<i>ṣāñ</i> “own” (indecl.)	<i>ṣāñ</i>	1860a4
<i>ṣar</i> “hand”	du.loc.: <i>ṣārñmene</i>	1859b2
<i>ṣale</i> “mountain”	sg.abl.: <i>ṣālemem</i>	1859a3
<i>ṣārtṭike*</i> “one who encourages (?)”	sg.obl.: <i>ṣārtṭikem</i>	1860b4*
<i>ṣāṃs-</i> “to count”	ger.I.m.sg.nom.: <i>ṣāṃṣālle</i>	1860a3
<i>ṣām-</i> “to sit”	prs.part.act.pl.: <i>ṣmeñcañ</i>	1860a4
	prs.part.mid.: <i>ṣmemane</i>	1859a6*
<i>ṣukt</i> “seven”	<i>ṣukto</i>	1859b5
<i>ṣe</i> “one”	m.sg.nom.: <i>ṣe</i>	1859b1
	m.sg.nom.: <i>ṣṣe</i>	1859a5
<i>ṣek</i> “always”	<i>ṣek</i>	1860a4, a4, b3, b4
<i>ṣkas</i> “six”	<i>ṣkāś</i>	1859b5
<i>samsār</i> “cycle of rebirths”	abl.: <i>samsārmem</i>	1860a6
<i>samsārṣṣe</i> “prtng to the <i>samsāra</i> ”	f.pl.obl.: <i>samsarṣṣana</i>	1860b2
<i>sargga</i> “chapter, section”	sg.nom.: <i>sarggā</i>	1860a3
	sg.nom.: <i>sārgga</i>	1860a3
<i>su</i> “the” (anaphoric dem.pron.)	m.sg.nom.: <i>sū</i>	1859b2
	m.sg.obl.: <i>ce_u</i>	1860b2
	m.sg.gen.: <i>cvī</i>	1859b3
	m.pl.nom.: <i>cai</i>	1860a5, a5, b2, b4
<i>se</i> “this” (dem.pron.)	m.sg.nom.: <i>se</i>	1859b4, b4, b5
	n.sg.obl.: <i>te</i>	1859a2
<i>snai</i> “without”	<i>snai</i>	1859a2*, a2, a2
	<i>snaiy</i>	1859a3
<i>speltke</i> “effort, zeal”	sg.perl.: <i>speltkesa</i>	1860a5
	sg.perl.: <i>speltkesā</i>	1860b3
<i>tsāñk-</i> “to arise”	3pl.pret.act.: <i>tsāñkare</i>	1859a1
<i>tsālp-</i> “to escape”	inf.perl.: <i>tsālpatsisa</i>	1860a

Kuchean Fragments THT1859 and THT1860 in the Berlin Collection

Ogihara Hirotoši

Keywords: Kuchean Buddhism, Maitreya literature, *Book of Zambasta*

Abstract

In this paper, Kuchean (i.e. Tocharian B) fragments THT1859 and THT1860 in the Berlin Collection are treated with philological and linguistic notes in comparison with parallel texts from other Buddhist literature. In Tocharian philology, these two fragments have been classified as Archaic Tocharian B on paleographic and linguistic grounds. Although some passages and words in these fragments have been quoted by scholars, the task of interpreting and identifying them in comparison with parallel texts in other Buddhist literature still persists. Furthermore, a comparison with Chinese literature helps identify them as a part of the Maitreya literature, namely, the final part of the Maitreya legend, which primarily narrates Maitreya's encounter with Mahākāśyapa at Mount Kukūrapāda and the 18 miraculous powers demonstrated by Mahākāśyapa. They are also comparable with Chapter 22 of the *Book of Zambasta* in Khotanese wherein they reflect the situation of the Maitreya cult in Central Asia during the fifth century.

(おぎはら・ひろとし 京都大学白眉センター/文学研究科)